

咸臨丸終焉百四十周年記念事業

演劇脚本

とこしえ

# 永久に、咸臨丸

作 合田一道



鈴藤勇次郎作『咸臨丸難航図』(横浜開港資料館保管)

木古内町観光協会  
咸臨丸とサラキ岬に夢みる会

スタッフ

演出

舞台監督

照明

衣装

映像担当

その他

キャスト

「一幕一場」 「三幕二場」

勝海舟

福沢諭吉

「一幕二場」

木村摂津守

鈴木勇次郎

小野友五郎

中浜万次郎

成臨丸の乗組員 多数

ブルック大尉

成臨丸に同乗のアメリカ軍人数人

・ 鈴木勇次郎描く「成臨丸航海図」

・ サンフランシスコの舞踏会の絵

・ 坂本龍馬、榎本武揚などの写真

「二幕一場」

徳川慶喜

老中

諸藩の藩主、家老ら多数

「二幕二場」

勝海舟

榎本武揚

「二幕三場」

榎本武揚

小林文次郎

春山弁蔵

春山鉦平

乗組員 A

乗組員 B

乗組員 C

清水次郎長

次郎長の手下多数

小田原藩士（朗読）

五言絶句を詠む男性（朗読）

・ 小杉雅之進の絵「徳川海軍八隻、品川沖開帆之図」

「三幕一場」

佐藤孝郷 筆頭家老

三木勉 家老

妊婦

威臨丸の乗船者多数

新井田久治郎

若衆 A

語り 勝の妻、民子

# 演劇脚本「永久(とこしえ)に、威臨丸」

一幕一場(サラキ岬の海岸)

出演

勝海舟 38歳

福沢諭吉 27歳

北海道木古内町サラキ岬。茫々たる海岸線。潮騒の音  
左手に侍姿の勝海舟と福沢諭吉とじつと遠くを見つめる海舟。

福沢(不審そうに)先生、何か見えるのですか。

海舟、憑かれたように海を見つめる。カモメの啼き声。

福沢 先生つ、勝先生つ、どうかなさったのですか。

海舟 (ややあつて)、福沢君、見えぬのか。ほら、ほら、そ、そ、そこに！

か、か、成臨丸がつ！

福沢 ええつ、か、成臨丸が・・・。

何をいのです。勝先生！

二人が見つめる先に、成臨丸、忽然と現れる。

福沢 おおつ、成臨丸、成臨丸だ。

海舟 (あえくように)うーむ。おいらたちが乗った栄光の成臨丸だ。  
この岬の沖で沈んだはずの船が、…そ、そ、そこに…。

二人、感動的に立ちすくみ、その場に崩れるように倒れる。(暗転)

語り(海舟の妻、民子の語り)あの人は、何かというと、成臨丸、成臨丸と申しまして。

成臨丸が命のような人でした。はい、私、勝麟太郎、海舟の家内の民子と申します。

勝という人は、本当におかしな人でして、何事にも夢中になる質(たち)でしてねえ。

あれは安政7年正月、日米修好通商条約の批准のため、アメリカに正使が送られることになった時、遣米使随伴船に成臨丸が選ばれました。副使の木村撰津守様に乗られ、夫の勝はその船の軍艦教授方頭取、つまり艦長に任命されたのでございますよ。

木村撰津守様をお乗せして太平洋を渡り、アメリカの西海岸まで参り、正使の新見様が無事にワシントンに着かれるのを確認してから、帰国するという大役でした。

安政7年1月19日、成臨丸は正使の乗るポーハタン号より一足早く、浦賀を出帆しました。  
ところが…。

出演  
勝海舟 38歳  
福沢諭吉 27歳  
木村撰津守 31歳  
鈴藤勇次郎 35歳  
小野友五郎 45歳  
中浜万次郎 34歳  
ブルック大尉  
アメリカ兵 数人  
その他 二、三十代が多い。

風波に弄ばれ、揺れる成臨丸。海舟、木村撰津守、福沢、その他、揺れで吐く者、甲板に倒れている者もいる。そんな中で小野友五郎、中浜万次郎、福沢諭吉の三人がアメリカ兵らとともにせつせと立ち働いている。

海舟 うっ、うむっ、なぜ荒れる、腹が痛い。ブ、ブ、ブルック大尉を呼べっ。

福沢 はいっ。（よろめくように立ち去る）

ブルック大尉（急ぎ足で駆け寄り）ダイジョウブ。アンシンシナサイ。アナタ、ヘヤデヤスミナサイ。テイトクモヤスンデイマス。

海舟 うむっ、頼む。何としてもアメリカ大陸まで行かねばならぬ。

ブルック大尉 ヤリマス。ワタシノメンバー、ウデイイ。シンパイナイ。

海舟 す、すまぬ。

ブルック、アメリカ兵らのはか、小野、万次郎、諭吉に帆を下ろすよう指示。何とか帆を下ろす。船の揺れ、少し収まる。

ブルック大尉（部屋で日記を書き、読む） カツカンチョウハゲリヲオコシ、キムラテイトクハフネニヨツテイル。ニホンジンハゼンイン、フナヨイダ。

語り それはそれは本当にひどい荒れようです。二十年ぶりの物凄い暴風だったと申します。運用科士官として乗り込んだ鈴藤勇次郎様の描いた絵が残っていますが、想像を絶する凄さだったことがわかります。

鈴藤勇次郎描く「成臨丸航海図」。

語り もしブルック大尉らが同乗していなかったなら、どうなったものか。このブルック大尉らアメリカ軍人たち十一人は、日本周辺の測量をしている時、暴風雨に会い、船体を岩場にぶつけて破損して、帰国できないでいたのです。そこで勝は、アメリカに帰国させてやるから、その代わり、操船が困った時は助けてくれ、といって、同乗させたのです。出帆早々、勝の読みがあたっただけです。

でも、こんなこともあつたそうですよ。へそ曲がりな人ですから、上司である副使の木村撰津守様と衝突したりして。

海舟 よござんす。操船は全部、撰津守様にやってもらいやしやう。

木村 何を申す。勝殿がいなければ、この太平洋を横断できるはずがないではないか。

海舟 いいや、おいら、もう用事がねえから江戸へけえり。運用方、バッテリーをおろせ。

木村 やめないか。勝さん。

ブルック大尉 イケマセン。コンナタイヘイヨウノマンナカデ、ムチャライツチャア、イケマセ<sup>5</sup>  
ン。  
海舟 うるせえー。

慌てて海舟を押しとどめる者、困りはててうるうるする者など。

語り なーに。うちの人は艦長と云ったって四十一石取りのしがな御家人。相手の撰津守様は二千石取りの軍艦奉行です。年齢が若いのに、自分の上にいるのが癖にさわったんでしようね。

成臨丸、悠々と太平洋を進む。月が出る。

語り 出帆して五日目になつて、荒れ狂つていた波も鎮まり、月まで出てきました。船酔いしていた乗組員たちも起きだしてきました。船は風を受けて順調に進んでいきます。一日、六、七里という日もあれば、百里も走る日もあったといひます。でも、三十数日のうち晴れた日は七日間だけといひますから、よほど難儀な航海だったんですね。

乗組員たちが船の地先にきて、わいわい騒いでいる。

小野 おい、あれは何だ。鯨か。

万次郎 イルカですよ。このあたりはイルカの回遊する海域なんですよ。

福沢 そうか。

小野 万次郎さんは、世界をまたにかけた海の男。さすがにくわしいですね。

万次郎 しかし、小野友五郎さん、あなたの測量術は見事です。いま、船はどのあたりにいるのでしょうか。

小野 北緯42度23分7秒。西経169度46分37秒。ちよつと日付変更線を通つたところです。江戸から123里。きょうでもう22日目になります。

万次郎 さすが、友五郎さん。

福沢 小野さんは、すごいですねえ。敬服しましたよ。

語り 船はそれからも風や波に襲われながらも、アメリカ西海岸に向けて突き進みました。

途中、飲み水が足りなくなり、水桶に錠をかけて誰にも触れさせない処置を取るなどして、考えられない苦勞をしたようです。

2月24日、小野友五郎様が「アメリカ西海岸まで120里ばかり。順調にいけばあと二日で到着」と書いた貼り紙を出したのです。

万次郎 あと、二日かっ。

福沢 しかし、ブルック大尉は、まだ三日はかかるといつて否定していました。

万次郎 そうですか。私は友五郎さんの測量術を信頼していますから、きつと言つ通りになると信じています。

福沢 そうかなあ。そうなればいいのだが。

暗転して、再び明るく。

語り そして二日後、小野友五郎様の推測通り、左手の一点に山影が望まれたのです。アメリカ西海岸、カリフォルニアの大地でした。

大勢の乗組員たちが船橋に集まつてきて、前方の陸地を見ながら、興奮して口々に、「おおっ、

陸地だ」「アメリカだ」などと叫んでいる。  
腕組みをして前方を見る海舟。

万次郎 やったぞっ。友五郎さんの読みが当たったぞっ。

福沢 (涙をぬぐいながら) すこいぞ。アメリカに勝ったぞ。小野様がアメリカをしのいだぞっ。

語り それはもう、大変な騒ぎでした。こうして成臨丸の夫、勝海舟らはサンフランシスコに上陸し、アメリカから賓客として心からの歓待を受けたのです。でも、初めて見る異国は想像を絶したと申します。羽織袴で正装した木村摂津守様や夫の勝らは晩餐会に招かれて、ナイフやフォークという見慣れないもので肉料理を味わい、アイスクリームという珍しい食べものまでいただき、ピアノという初めて聞く演奏に肝をつぶしたのです。

#### 一幕三場 (映像)

演奏会の音楽流れる。

(映像で) 着飾ったサンフランシスコ市長や区長、及び美しく着飾った夫人たちのダンス。踊る姿に、呆然と見とれる海舟たち。

語り こうした異国の体験は、大きな衝撃を受けました。いまは、カルチャーショックなんていうんですってねえ。

#### (問)

成臨丸の夫、勝海舟らが、無事に浦賀に帰ってきたのは安政7年5月5日でした。勝は、日本人だけで太平洋を横断したと申しておりますが、それは復路だけの話です。外人を極端に嫌っていた時代ですから、勝は、帰国するアメリカ人をうまく利用して太平洋を横断したってわけです。ええ、それくらいの芸当はやってのける人でしたからねえ。ほっほっほっ。

風波の音。揺れる船影。

語り

成臨丸が帰国したころ、国内は尊皇攘夷の嵐がしだいに高まっていました。異国と交渉を持った幕府大老の井伊直輔が水戸藩浪士らに襲われて絶命しました。外国人を見つけると、物もいわずに切り捨てる、異人斬りが横行し、ロシア艦の士官と水兵、フランス公使の付き人の中国人などが次々に殺されました。外国公使から厳しい抗議を受けた幕府は、外国人居留地の警戒を強めました。事件はなかなかおさまりませんでした。

成臨丸はこのころ、神奈川警備につき、異国人に対する不穏な動きを見張ったり、対馬や小笠原島へおもむき、警戒に当たっていました。

国内がせわしなく動く中、うちの人は講武所砲術教授方になり、軍艦操練所頭取から軍艦奉行並、そして軍艦奉行に取り立てられました。あの坂本龍馬さんが飛び入りでうちの人の弟子になったのは、この頃のことですよ。

(映像) 坂本龍馬。(少し遅れて、榎本武揚)

語り

文久2年6月、成臨丸はオランダ留学生榎本武揚様らに乗せて長崎へ赴きました。

榎本様らは長崎で異国船に乗り換え、オランダへ向かったのです。

後で考えてみると、不穏な空気に包まれていたとはいえ、この時期が、成臨丸にとっても、うちのの人にとっても、もっとも充実していた時期だった、といえるかれしれませぬ。

二幕一場（二条城内）

出演

徳川慶喜

老中

その他 諸藩の藩主、家老など、年輩者が多い。

砲弾が乱れ飛ぶ音。喚声。

語り

文久3年8月、公武合体派の朝廷クーデターが起こり、長州派公卿が追放されました。続いて天誅組が挙兵し、京都は騒然となりました。「八・一八の政変」です。

翌文久4年には禁門の変が、続いて四力国の異国の連合艦隊が下関を攻撃しました。

国内は、いまに異国に乗っ取られるとおののきました。

幕府将軍、徳川慶喜が突然、「大政奉還」に踏み切ったのは慶応3年10月13日のことでした。

京都・二条城の大広間。在京の藩主や家老らが集まり、騒いでいる。

老中が登場。

老中

静まりなされ。お静かに。上様が参られますぞ。本日、上様より、皆にご内意が伝えられます。席にお着きなされ。

藩主や家老ら座る。

近習の声「上様、おなりーい」一斉に平伏する藩主や家老ら。

前面に徳川慶喜、座る。

慶喜

余は土佐藩主、山内容堂の建白を容れ、ここに大政を奉還する。

慶喜、それだけ言つと立ち上がり、奥へ去る。

藩主、家老ら、たがいに顔を見合せ、「上様が大政を奉還するだ」と「幕府がなくなるといふことか」「上様は血迷われたか」「すぐさま国もとへお届けせねば」などと言ひ、右往左往しながら、左右に立ち去る。静まり返る城内。

語り

あの日、將軍・慶喜様は、本気で大政を朝廷にお返しするつもりだったのでしょつか。

勝に言わせると、「なまに、おれが將軍職を辞めても、誰もその後を継げる者なぞ、いるはずがない。尊皇だ、壊夷だとさわいでいるやつらを、すこしばかり驚かしてやれ、いずれ朝廷は、また頼むと頭を下げてくる…、それくらいしか考えていなかった、つて申すのです。

たしかに朝廷は大政奉還を認めたのですが、慶喜様に政治向きはこれまで通り行え、と申し渡しました。夫・勝の推測の通りでした。ところが…。

戦争の音。激しいせめぎ合い。  
官軍のマーチ。

出演

勝海舟

榎本武揚

語り 鳥羽・伏見で、幕府軍と薩摩・長州軍がぶつかり合い、戟いになったのです。ええ、戊辰戦争の始まりです。幕府軍は圧倒的な戦力だったのですが、薩摩、長州軍は、大砲や銃などの近代兵器を使って、ドカン、ドカンとやるもんですから、たまったもんじゃない。幕府はあつという間に敗れてしまつて。

朝廷は勝つた薩摩、長州軍を朝廷方の軍隊として認めたもんですから、幕府方は朝敵にされてしまつて。ほら、勝てば官軍つて言葉があるでしょ。あれですよ。

うちの人、勝海舟は、好むと好まざるとに関わらず、徳川家の代表として話をまとめる立場で、朝廷・新政府との交渉に当たることになったのです。それは命がけのものでした。

江戸を攻撃する新政府軍の参謀、西郷隆盛と会つて何とか戦争をくい止め、江戸は砲火から免れることができたのですが、海軍を率いる榎本の釜さんは、言うことを聞きやしません。艦隊を率いて館山沖へ姿をくらましてしまつた。勝は困り果て、単身、釜さんの軍艦に乗りつけて…。

開陽丸の艦長室。外で榎本の部下たちが騒いでいる。

海舟 釜さん、そりゃ、いけねえよ。軍艦を率いて朝廷を脅すなんて、いけねえよ。

榎本 わかつてください。勝さん。徳川が、なぜ朝敵にならなければ、いけねえんですかい。徳川が朝廷に、何をしたつていふんですかい。勝さんは、卑怯だ。戦わないで鉾を収めるなんて、おれにはできねえ。

海舟 まだわからぬのか。榎本釜次郎よ。いいか、よく考えるんだ。おめえさんが憎んでいる薩摩や長州は幼い天皇様を担いで官軍顔している。そりゃあ、気持ちはわかる。だがなあ、ここが辛抱のしどころだ。戦つたらおめえさんのいう通り、勝つかもしねえ。いや、おめえさんの指揮する海軍なら、勝つだろうよ。しかし、勝つても勝ちにならねえんだよ。

榎本 勝ちに、ならねえ？

海舟 ああ。そういうことだ。上様は、戦つ気なんかありやしねえんだ。戦つて、勝つても、朝廷に弓を引いた極悪人にされてしまふ。それをちゃんと知つているんだよ、あの方は。

榎本 だからといって、このまま手が引けるか。このままおめえと。

海舟 釜さん、ここんところは俺の考えに合わせしてくれねえか。

榎本 何と。何をしようというのいふのでやんすか。

海舟 うむ。まず朝廷に軍艦も輸送船も、全部差し出すんだ。

榎本 差し出す？ なぜ、そんなことをせねばならぬのだ。幕府が作り上げた最強の艦隊ではないか。

海舟 わからぬか。そいつをそっくり差し出して、そして改めて、徳川家に少しでもだけお譲り願いたい、と下手に出るんだ。そうしたら朝廷は、新政府は、どう出ると思つ。

榎本 しかたがねえ、少しは相手の顔をたててやらあ、となるだろう。そこだ。

海舟 ふーむ。

そこで、おめえさん。そのうち大事な軍艦を選んでもらつちやうんだよ。こいつとこいつは、こつちでいたたくつてな。ああ、その点は、俺に任せろ。うまくやつてやる。そうなれば、おめえさん、筋が通るつてもんだらうよ。

榎本 ふーむ。そうか。

海舟 はっはっはっ。

榎本 はっはっはっ。



笑いながら、最後には真顔になり、抱き合い二人。

語り 勝海舟と榎本武揚。この二人、どちらも江戸っ子でして。長崎の海軍伝習所の先輩後輩に当たるんです。だからおたがいの心の中はお見通し。口は悪いが、心底喧嘩する気なんぞないんです。面白いもんですねえ。男っていろいろのは。ふっ、ふっ、ふっ。  
結局、釜さん、いや、榎本武揚様は幕府海軍の軍艦八隻を全部差し出して、改めて徳川家に四隻もらい受けたんです。しかももらったのは開陽丸、幡竜丸、回天丸、神速丸・・・と優秀な軍艦ばかり。それに輸送船となった成臨丸も。相手に渡したのは、ええ、ボロ船ばかりだったんですって。

## 二幕三場（成臨丸船内）

出演

榎本武揚

成臨丸船長 小林文次郎

同副船長 春山弁蔵

準士官 春山鉦平

乗組員 A

乗組員 B その他大勢

清水次郎長

次郎長の手下 多数

暗闇の海。江戸・品川沖。

榎本艦隊（軍艦4、輸送船4）が勢ぞろいしている。輸送船のうちの一隻は成臨丸だ。成臨丸に軍勢がどんどん乗り込んできた。成臨丸は回天丸に曳航されている。

高らかに出航の合図が鳴る。

語り 慶応4年8月20日夜、江戸・品川沖。榎本武揚様は開陽丸を旗艦にした旧幕府艦隊八隻に二千数百の軍勢を乗せ、江戸・品川沖を密かに出航しました。  
成臨丸は機関をはずしていたので、回天丸が曳航しています。

小杉雅之進の絵「徳川軍艦八隻、品川沖開帆之図」

榎本（訓示）王政日新は皇国の幸福、我輩もまた希望する所なり。しかるに当今の政体、その名は高名盛大なりといえども、その実はしからず。王兵の東下するや、わが老寡君（ろうがかくん）をぶふるに朝敵の汚名をもつてす。これ一（いつ）に強藩の私意（しい）に出で氏日、真正の王政にあらず。我輩泣いてこれを帝閣に訴えんとすれば、言路梗塞（げんろこうそく）して情実通ぜず。故に此の地を去り、長く皇国の為に一和の基業を開かんとす。

船、波を蹴って進む。

語り 艦隊は北を目指して突き進みました。行く手は仙台。その先に蝦夷地へ向かおうという目論見なのです。ところが品川沖を出て間もなく、風が強くなり、海が荒れだしたのです。

荒れる海。翻弄される成臨丸。揺れる軸先に立ち、指揮する船長の小林文次郎、副船長の春山弁蔵。甲板を慌ただしく駆け回る乗組員らに指示する。

小林 (乗組員に)とも綱は大丈夫かつ。帆を緩めろつ。  
春山弁蔵 (乗組員に)急げつ。

一瞬、轟音とともに成臨丸座礁。乗組員、ぶつ飛ぶ。

小林 どこだつ。ここは、どこだつ。真つ暗闇で見えぬ。  
春山弁蔵 針路から、観音崎あたりかと。

再び轟音。揺れて、船、大きく傾く。しぶき激しく上がる。

小林 ううーつ。座礁かつ。全員、甲板に出ろつ。

春山 回天に伝えろつ。船を、船をつ、暗礁から引き離すのだつ。

動けない成臨丸。綱を渡し、離礁を試みる回天丸。

語り 回天丸の艦長、甲賀源吾殿の命令で、何度も何度も離礁が試みられ、何とか暗礁から離れることができた時、すでに夜はしらじらと明けていました。しかも艦隊は離ればなれになり、成臨丸と回天丸だけが取り残されてしまったのです。浦賀にいったん入った成臨丸は、再び回天丸に曳航されて出航したのですが、またも暴風雨にたたかれ、曳航綱は引きちぎられ、転覆の恐れが出てきたのです。船長の小林殿は船の安定を図るため、やむなく三本のマストのうちもっとも大きいマストを切り倒したのです。悲壮な決断でした。

小林 これでは、もう奥羽へ行くのは難しい。風をたよりに、駿府へ向かうほかあるまいぞ。

春山 いかにも。さて、はたして駿府まで行けるかどうか。

語り その時、同乗した小田原藩士の記録が残っています。

藩士の記録(朗読)東北風強く、逆浪(ぎやくろう)天に沖(ちゆう)し、各船皆危険なり。巨濤(きょとう)、湧起し甲板を洗い、マストを打ち、海面は忽(たちま)ち変じて山となり、また谷となる。また風中の枯れ葉の如く、目眩(くら)み、心震え、その困難、名状すべからず。…余は新たな衣服を着し、刀を帯、素縄をもって身を縛し、拳銃を握って死を待ちたり。

乗組員A おおつ、陸地だつ。駿府の清水港だつ。

その声に、乗組員らどやどやと甲板に集まってくる。

乗組員B 清水の折の浜だぞ。

乗組員C われらが徳川家の新しい領地だつ。助かったつ。

などなど口々に。喜びに溢れる甲板。

小林 拙者、すぐにも駿府藩へ赴き、事の次第を報告致そうと存ずる。しかる後に船体を直し、艦隊の後を追いかけるつもりじゃ。

春山 はい。そのようになさりませ。すぐにも船体の修理に取りかかりましょう。それまで、陸兵を上陸させ、英気を養わせようと存じまする。

小林 左様、頼む。

春山 陸へ居つ、上陸、用意つ。

語り 品川沖を出航して、すでにひと月近くが経とうとしておりました。

悲劇が起こったのは、慶応から明治と改元されて間もなく、船が着いた翌日のことでした。船長の小林が、艦隊の脱走についてその正当性を説明しようと、再び駿府藩庁に赴いた直後のことでした。

突然、砲丸が成臨丸を襲う。船内に残っていた副船長春山、弟の準士官、春山鉞平ら、慌てて甲板に出る。その間に一人、弾丸を受けて即死。

乗組員 A 敵は、新政府軍の艦隊つ。富士山丸に飛竜丸、武蔵丸つ。

春山鉞平 よしつ。(弁蔵に向かい) 兄上つ、相手は、攻撃を続行中つ。だが当方は輸送船。大砲も備えておりませぬ。

春山弁蔵 抵抗してはならぬ。急げつ。

春山鉞平 白旗を掲げろつ。

乗組員 A (白旗を振り) 撃つなつ、撃つなつ。この旗をみよつ。

だが砲弾乱れ飛び、甲板上の乗組員、バタバタと倒れる。海中に落ちて死ぬ者も。

敵艦が接近して、威臨丸に新政府軍の軍勢が抜刀してどつと売り込む。この間にも銃声が続く。軍勢ら、春山弁蔵を取り囲む。

敵兵 A 朝廷の艦船を盗むとは不埒千万。許せぬつ。

敵兵 B 抵抗する者は切るつ。貴様ら、天皇様を何と心得るかつ。

春山弁蔵 待てつ、待たぬか。拙者らの船は輸送船なり。戦うの意志あらず。引けつ、引けつ。

敵兵 A 何をこしゃくなつ。(と弁蔵を押さえつける)

春山鉞平 貴様らつ、兄上につ、手を出さず気かつ。(刀を抜く)

戦いになり、春山弁蔵、鉞平、銃弾を浴び死ぬ。一人が火薬庫に火をつけ、爆破。甲板は火の海に。死者続出し、腹を切ろうとする者も出る。

小林 待てつ、待たぬか。(駆け寄り) 船長の小林文次郎であるつ。このざまはなんたることかつ。

敵兵 A おおつ、敵将だつ。

敵兵 B 召し締めつ。この天朝を欺く者どもをつ。

どつと駆け寄り、小林を取り巻いてぐるぐる巻きにし、殴る、蹴るの続ける。小林、血まみれになり、意識を失い、昏倒。敵兵らは死体を海に投げ込む。

語り それはそれは、凄まじいものでした。新政府軍は殺害した徳川の人々の遺体を海中に投げ込み、船長の小林らを捕虜にし、成臨丸をだ掃して、悠々清水港を引き上げたのです。成臨丸の悲しい最期でした。

清水港は、死の海と化しました。海面には遺体が浮きつ、沈みつしていますが、新政府に恐れをなして、誰も近寄ろうとしません。

暗闇の清水港の沖合。

海中に漕ぎだす小舟。乗り込んだ黒い影が海面に浮かぶ遺体を引き揚げる。

「ひでえ、遺体だ」「これが天朝様のやることか」「ちくしょうつ、いまに見ていろつ」

「おいっ、静かにしろ」などの声が……。

語り その時、遺体の収容に立ち上がったのが、清水港の親分、次郎長こと、山本長五郎でした。長五郎は、「死んで官軍も賊軍もあるものか」といって、自分たちを動員して、一夜のうち遺体を全部、引き揚げ、江尻の浜に葬ったのでした。

「おれは無学だから、官軍がいいのか、賊軍が悪いのかなんて、わからねえ。しかし主家  
の徳川家のために死んだ屍を、このまま見捨てるわけにはいかねえ」って。  
いい気つぶですなえ。ほれほれしちやいますね。長五郎って男は。

男の声で、五言絶句を詠む。(文字、映像で)

砂広くして孤松(こしょう) 秀(ひい)で  
空しく留(とど)む壮士(そうし)の墓  
水鳥何をか恨(うら)む  
飛んで夕陽に向かつて鳴く

溶暗。

三幕一場(成臨丸船内)

出演

佐藤孝郷 家老、開拓執事 22歳

三木勉 家老 42歳

女性(若い)

海上を行く成臨丸。波浪に揺れる船。

語り 榎本様が率いる旧幕府軍は一気に蝦夷地の箱館・五稜郭を奪い、松前を征服しましたが、翌  
明治2年夏、新政府軍は乙部から上陸して反撃を開始し、壮絶な戦いになりました。ここ木  
古内でも激しい戦いがありました。新政府軍は次々に後続を送って攻め込み、旧幕府はしだ  
いに劣勢になり、榎本様はついに降伏します。

こうして北の大地まで揺るがした戊辰の戦いは終わりを告げたのでした。  
成臨丸が再びその姿を現したのは、新しい明治の御代になり、開拓使が発足して間もなくの  
ことでした。清水港で挿された後、大がかりな修理がほどこされ、開拓使の輸送船になっ  
たのでした。

明治4年9月12日、成臨丸は、北海道に移住する仙台藩白石領の片倉小十郎の家臣らに乗せ  
て、仙台の寒風沢港を出航しました。戊辰戦争で敗れた人たちが、悲壮な覚悟で故郷を捨て、  
新しい天地を目指したのでした。

暗い音楽。揺れる船。

語り ところが途中、暴風雨にたたかれ、成臨丸は南部沖の太平洋上まで遠く流され、乗船者たち  
は船酔いを起こして苦しみます。そんな中、お腹の大きかった女性が赤子を流産し、船内で  
亡くなったのです。移住団をまとめる家老の佐藤孝郷様は、急ぎ小樽行きを航路を変え、函  
館に着いたのです。

葬儀を済ませた一行は、函館から再び成臨丸に乗り込み、出航しました。  
この日、明治4年9月20日昼過ぎのことでした。

「出航、出航」の声に混じって、「今度こそ、小樽に着けるぞ」とか「いよいよ新しい土地だ」  
「がんばってな。もう少しの辛抱だ」などの話声。

船が岸壁を離れる。明るい表情で岸边の明かりを見る乗船者たち。

語り 成臨丸は函館の港を離れて、目的地の小樽を目指して津軽海峡を西に向かいました。  
ところが夕方になるころから急に風がひどくなり、成臨丸は高波に襲われました。

船底に横たわる家族たち。揺れるたびに飛ばされる。たがいに助け合う。と、突然、船が暗礁にぶつかり、座礁して傾く。波が入ってくる。騒ぐ人々。

三木 (乗船者たちに向かい) 騒ぐなっ。落ちつけっ。

佐藤 気をしっかり持てっ。家族は家族で離れるなっ。

三木 岸辺に灯が見えるぞ。(佐藤に向かい) このあたりでしょう。

佐藤 わからぬ。函館を出てふた時、釜谷か、泉沢あたりか。うっ？。ここは、サラキ岬、サラキ、み、さ、き…。

三木 サ、ラ、キ…。

混迷する船内。荷物を背にした乗船者たちが、舳先に詰めかける。

三木 拙者、あの灯の見える村へ行き、遭難を伝えます。佐藤様、救助船を頼んで送り込むの

で、老人や子どもから先に救助船に乗せてほしい。お願い申す。

佐藤 しかし、下船も、乗船順にするのが筋というものだろう。

三木 何を申します。この危急の時に、執事殿のお言葉とは思われぬぞ。拙者の母は高齢でござる。何とか…。

佐藤 (言葉を遮り) 黙らっしゃい。家老三木殿とも思われぬお言葉。いまは執事である拙者の命令に、従っていただきたい。

三木 何っ。何が…。わからぬが、この気持ち(いきなり腰の刀に手をかける)

驚いて止めに入る男たち。

三木 (男たちに) 後は頼むっ。

三木、いきなり、海中に飛び込み、抜き手を切って岸辺へ。

語り 生きるか死ぬか。それは切迫した雰囲気だったと申します。家老の三木様は、三百メートルほど離れた岸辺にたどり着き、村の家々に遭難を知らせたのです。

この村が現在の木古内町泉沢の集落だったのです。

三幕二場(岸辺、前場)三幕一場の片袖を使う)

出演

新井田久治郎

若衆 A

語り 急報を受けた名主の新井田久治郎様は、若者たちに命じてすぐに小型船を出し、救助に向かったのです。

びしょ濡れになりながら、救われて岸辺に降りる人々。

新井田 おうおう、すっかり濡れてしまったな。ささ、はよう、はよう、家に入って暖まるのじゃ。

(若者に向かい) すぐに案内申せ。

若衆 A はいっ。ささ、どうぞ、こちらへ。

乗組員の老人、子どもたち「ありがとうございます」「やっと生きた心地がしたわい」などと

言いながら、立ち去る。

語り こうして成臨丸に乗っていた方々四百一人は、全員無事に救われて、この泉沢の人々の厚い情けで、一夜を過ごしたのです。

明るい音楽。

語り こうして成臨丸の人々は、後からきた庚午（こうご）丸に乗り移って小樽に向かいました。そうして、現在の札幌市の白石、手稲を作り上げたのです。

しかし、後になって、意外な事実が明らかになったのです。実は成臨丸が遭難した日は、月がこうこうと照り、海上は金波銀波で光っていたといふのです。

そう、あの日は暴風雨なんかじゃなかったんです。更木岬という岬は、なだらかに沖合に突き出していて、まだ海図もなかった時代ですから、航海する船にとっては難儀な場所だったんでしよう。操船を失敗して暗礁に乗り上げたのを知った開拓使は、この際、原因を天候のせいにして、もみ消してしまつたのです。

歴史のひだに隠れた意外な事実とでも申しましようか。

一転、暗闇に。

三幕三場（サラキ岬海岸）

出演

勝海舟

福沢諭吉

北海道木古内町更木岬。茫々たる海岸線。潮騒の音。

左手に待姿の勝海舟と福沢諭吉。じつと遠くを見つめる海舟。

福沢 （不審そうに）先生、何か見えるのですか。

海舟、憑かれたように海を見つめる。カモメの啼き声。

福沢 先生っ、勝先生っ、どうかなさつたのですか。

海舟 （ややあつて）福沢君、見えぬのか。

ほら、ほら、そ、そ、そこに！ か、か、成臨丸がつ！

福沢 ええっ、か、成臨丸が。何をいふのです。勝先生！

二人が見つめる先に、成臨丸、忽然と現れる。

福沢 おおっ、成臨丸、成臨丸だ。

海舟 （あえぐように）うーむ。おいらたちが乗った栄光の成臨丸だ。

この岬の沖で沈んだはずの船が、…そ、そ、そこに…。

二人、感動的に立ちすくむ。（暗転）

終わり